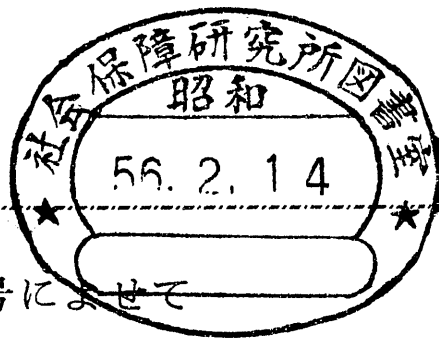




馬場所長退任記念号によせて

この機関誌『季刊・社会保障研究』は、本年度第16巻を数える。そして、この第3号は、研究所が16周年を迎えた時点に発行される。

その16年を顧みると、前半の8年、研究所は、初代山田雄三所長の指導によって基礎を固め、後半の8年間、第2代馬場啓之助所長のもとに、前半期に敷かれた軌道にそって発展を重ねてきた。

その馬場所長は、本年1月退任された。4年の任期を2期つとめられた馬場所長に対する感謝と惜別の念をこめて、本号は「馬場啓之助所長退任記念号」とすることになった。この第16巻第3号が、このように銘うたれることは、研究所をあげて所長の労をねぎらいたいという意志の表明にほかならない。

馬場所長は、所長に就任される前から、参与、理事として本研究所の運営に参加された。そして、このたび退任されるまで、自ら本誌に多くの論文を執筆された。また、所長になられて後も、『資本主義の逆説』や『福祉社会の日本的形態』などのように、社会保障をめぐる卓抜な見解が提示されている著書を公刊された。これらの著作活動を通じて、馬場所長は、経済哲学的素養の上に築きあげられた学識によって、研究所の研究活動の枠組を示し、その基盤ともなるべき理論を提供された。同時に、近代経済学の該博な学問的知識によって、社会保障をめぐる諸モデルの構成についても先導的な役割を果たされた。これらの諸業績が研究所に対する社会的評価を高めたことはいうまでもない。

こうした馬場所長の研究成果についての的確な賛辞を述べることは、専攻分野の狭い筆者にとって、到底できないことであるが、それらの中で、つよく印象づけられているのは、日本の社会を論じて、「中間集団主義」という概念を提起されたことである。この独自の概念と、この概念を帰結された分析からは、教えられるところが多かった。そして、この概念は、近代から現代に至る日本社会の構造分析に対して有効であったが、今後の日本社会を考えるうえでも、重要な視点となるように思われる。戦前日本の自営業者主体の社会が雇用者主体の社会に転化した現在、馬場所長のいわゆる「中間集団主義」は、職場社会に集中的にみられる。そして、それが戦後日本の高度経済成長を支えた社会的条件であったといえてよい。しかし、今後の日本社会において、この職場中心の「中間集団主義」は変容せざるをえないように思われる。

そして、この変容は、本研究所の研究主題である社会保障や社会福祉が、いよいよ重大な意義をもつことにつながる。低成長下、高齢化社会の急速な展開の中で、中間集団としての企業的職場の連帯の限界は、大きくなってゆかざるをえないからである。すなわち、世代の交替がすすむにつれて、仕事重点の価値観がくずれ、職場への忠誠も弱まり、終身雇用志向は残るにしても年功序列制には変動が生じ、その結果、中間集団をこえる大きい社会的連帯としての社会保障や社会福祉が、あらためて見直されざるをえなくなるというわけである。

馬場所長が提言された問題と、その将来の展開を念頭において、社会保障研究所は、今後一層増大する負託にこたえるために、所外研究者の協力をえながら、その研究課題の追求に総力を結集しなければならない。そして、それこそが、馬場所長の多年の労に報いることにもなると思うのである。

1981年1月

福 武 直